

きもちは、 言葉を さがしている



第 59 話

水野 スウ

マエソラのこと

憲法お話の出前に呼ばれるようになって、20年あまりたちます。その頃は、憲法＝難しそう、自分に関係なさそう、と思う人が今よりずっと多かったように感じてたので、どうしたら憲法を少しでも身近に、自分ごと感じて帰ってもらえるだろうかと毎回、試行錯誤しながら伝え方の工夫を重ねていました。話す時は、できるかぎり主語を小さくして、ふだん使いの言葉で、私の日々の暮らしがどれだけ憲法によって支えられ、守られているか、その実感が聴く人に届くよう、そう願いながら語ってきて、その工夫は今も継続中です。

出前先では話の終わり頃によく「マエソラ」をします。マエソラ、と聞いた皆さんは一様に、え？という顔。「日本国憲法前文をそらんじることです。まえぶん、とも読む前文のそらんじを、私はマエソラと呼んでいます」と説明して皆さんやっと合点。だけどここでいきなりマエソラを始めると、前文が言葉の羅列に聞こえてしまいそうでもったいない。

なのでマエソラする前にはいつもちょこっと解説をつけます。

前文に何度も何度も出てくる「日本国民は」「われらは」「われらの」という言葉。これは今の憲法の主語が、わたしたち国民であることの確かな証拠です。この憲法の持ち主は主権者のわたしたちであって、政府の持ち物ではないということがわかります。この前文のすごいところは、先の戦争が誰によって引き起こされたのか、それをここでははっきりと言っていること。それを二度と繰り返させない、政府に対するその決意を求められているのは、他ならぬわたしたちです。世界中の人々が等しく平和に生きる権利を持っていて、そうあれと強く願っています。何より、この憲法が、自分だけ、自分の国だけよければそれでいい、という日本ファーストの憲法ではまったくないということです。

などと語った後で、マエソラを始めます。

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが

国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであって、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」

一人マエソラ

一人で家にいる時も何気にしょっちゅうマエソラしています。「われらは、世界中の人々が恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」のところでいつも、今が今、恐怖に泣き叫ぶ子どもたちの顔が浮かんできて胸がウツと詰まりそうになる。そしてこの「恐怖と欠乏」は今や、何も遠い国の戦場に限ったことではないとも思います。砲弾の飛び交っていないこの国であっても、若い人たちの抱く将来への強い不安、戦争に近

づいているみたいという怖れ、危機感、年代問わずの生活の苦しさ厳しさなど、恐怖と欠乏がすでによその国の話ではなくなっているんじゃないのかと。

一人でマエソラすることによって一体どんな意味があるのだろう、とも考えます。この前文を、きれいごとすぎる理想にしか聞こえない、と言う人もいるし、今の首相が「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」のくだりを、おめでたい、と発言したことも知っている。それでも私がマエソラするのはなんでだろう。

この憲法の理想は確かに崇高で、それゆえに実現はとってもとても困難だけれども、憲法というものにはやはり高い理想が必要と私は思っています。それがこの前文に込められているからそれに向かって一歩でも前に進みたいし、先の戦争への反省が端的に表現されていること、主語が明確で、国の都合を押し付けられていないことなどなど、マエソラするたびにそれを確認します。何より、声に出してそらんじることで、この憲法の理念が私のからだにじわじわ染み込んでいって、そうだよ、政府に好き勝手放題の政治させちゃいけないんだ、黙って見てちゃいけないんだ、という私の決意がまた少し強くさせてもらえる、そんな気持ちになるのです。

草かふえて前文ワークショップ

1983年から毎水曜の午後、わが家を開いてしている「紅茶の時間」は、いつの頃からか、個人のきもちも社会や政治の話もしあえる場になっていきました。それもあって、2016年からコロナ期までの数年間は、「紅茶」内の1時間を「草かふえ」と称して、今の憲法と2012年版自民党改憲草案を読み比べる時間にあてていました。

2016年は、夏の参院選で改憲派の議席数が、改憲発議に必要な3分の2に達した年です。衆議院ではすでにそうだったので、この選挙結果を受けて、憲法をかえるための国民投票が一気に現実味を増した年でもあります。その危機感から始めたのが「草かふえ」。当初は文字通り、自民党の草案、草の

案を学ぶことから始めたので、こういうネーミングになりました。

毎週の「紅茶の時間内草かふえ」では、毎回違う顔ぶれの人たちと何度か「前文ワークショップ」をしました。今の憲法前文を一節づつ区切って輪読した後、気になる言葉や、ここ大事、ここ好きだな、と思う箇所をそれぞれ発表しあいます。

「われら、って本当に何度も出てくるね、憲法の主語はわたしたち、なんだってこと改めて感じる」「戦争の惨禍が政府の行為だった、って書いてある。それを繰り返させないと決意する、その主語も、われらなんだ」「こんなことははっきり書いてる今の前文。改憲したい人たちからしたらこの部分、不都合できつとかえたいだろうな」「人間相互の関係を支配する崇高な理想、って言葉がちょっと難しい」「うん、お互いの違いを認めて尊重しあう、憲法13条の個人の尊重を思い浮かべるといいかも。難しいからこそその崇高な理想だけど、それを実践した人がアフガニスタンに水路を開いた中村哲さんじゃないかと思う」「自分だけよければそれでいいって憲法じゃないんだね、世界中の人々の平和を強く願ってる。それが憲法前文にちゃんと書いてあること、初めて知ったよ」などなど。井上ひさしさんの『子どもにつたえる日本国憲法』（講談社）や池田香代子さんの『やさしい言葉で日本国憲法』（マガジンハウス）がテキストがわり。この2冊もワークショップで度々輪読しました。

自民党の前文草案

そんなふうにして30～40分、今の前文をしっかりとっぷり、参加者全員で味わった上で、今度は自民党の前文草案を、また一節ごとに区切って輪読します。

「日本国は、長い歴史と固有の文化を持ち、国民統合の象徴である天皇を戴く国家であって、国民主権の下、立法、行政及び司法の三権分立に基づいて統治される。

我が国は、先の大戦による荒廃や幾多の大災害

を乗り越えて発展し、今や国際社会において重要な地位を占めており、平和主義の下、諸外国との友好関係を増進し、世界の平和と繁栄に貢献する。

日本国民は、国と郷土を誇りと気概を持って自ら守り、基本的人権を尊重するとともに、和を尊び、家族や社会全体が互いに助け合って国家を形成する。

我々は、自由と規律を重んじ、美しい国土と自然環境を守りつつ、教育や科学技術を振興し、活力ある経済活動を通じて国を成長させる。

日本国民は、良き伝統と我々の国家を末長く子孫に継承するため、ここに、この憲法を制定する」

読み終えるなり、参加してる人たちから言葉が次々あふれました。

「え？ 今の前文と違って、主語が、日本国、わが国、になってるところが多いよ」「天皇を戴く国家、ってうやうやしくて、なんか偉そうだ」「すごい国だって自慢してるみたい」「そのすぐ後に国民主権とか三権分立って一応書いてはあるけど、本気があまり感じられない」「先の大戦による荒廃って、政府になんの責任もなさそうな書き方」「うん、戦争と大災害、並列にすることで責任をぼやかしてる気がする」「国防とか、国を経済成長させるとか、家族は助けあうとか、義務という単語はここで一つも使ってないけど、実は義務がいっぱい隠れてる感じ」「国から、国民はこうあれ、と言われてるよう」「まるでどこかの会社の社訓にも見えてきたよ」

皆で語り合った最後に、こう質問します。この草案って一体誰のために書かれているんだろう。「国民のものって気がしない」「日本はすごい国だぞ、その国を守れ、って言われてるみたい」「国民のためでなく、国家のための憲法だ」などなど。この憲法をつくる目的が、「良き伝統と我々の国家を末長く子孫に継承するため」とある最後の一文を読んだ時、これは国のための、国の都合による憲法の前文なのだ、と参加者一同で確信しました。

憲法との距離を縮めるこんな前文ワークショップ。数人集まれば、誰でもいつでもどこでもできます。

今年2月にあった衆院選の結果、自民党は単独で3分の2を超える議席数を得ました。参議院での与党は少数派とはいえ、今の状況は憲法をかえたがっている人たちにとって、2016年以来のまたとない好機。数の力で、皇室典範改悪や国旗損壊罪、国家情報局会議創設法などなど、賛否分かれる法案を次々とおしている高市政権のこと。気づいたらあっという間にもう憲法がかえられていた、ということにもなりかねない。そうなる前に、憲法が気になる友人たちとこんな感じで前文ワークショップしてみるってどうでしょうね。

駅前のペンライトデモ

国会前のデモに連動するように、金沢駅前でも春以降度々、ペンライトデモが行われています。回数を重ねるごとに若い人たちの参加が増えてきました。SNSで探して、デモカレンダー（一人の主婦が始めたデモや集会の予定を発信するこのサイトには、2月からの半年間で約6850件の情報が載せられた）を見て、というひとりで参加の人、デモは生まれて初めて、という人も多いです。

金沢駅前デモには、私も時間の許す限り参加して、話したいことがある時はマイクを持ってスピーチします。ある時、そこでマエソラをしたら私の次にスピーチをした若い人が「聞いてて涙が出た」と言ってから、自分たちで計画しているデモの予告をしました。「今度、仲間とハンセン！カシパデモします」と。意味がわからなくて聞き返してみたら「戦争いやだ！のお菓子パーティの事です。昼間にお菓子

を持ち寄って、思ってること語りあう、ゆる〜いデモです」と。ちなみに彼女は金沢の大学生さん。同級生と二人でこの菓子パデモを計画してるんだと言います。

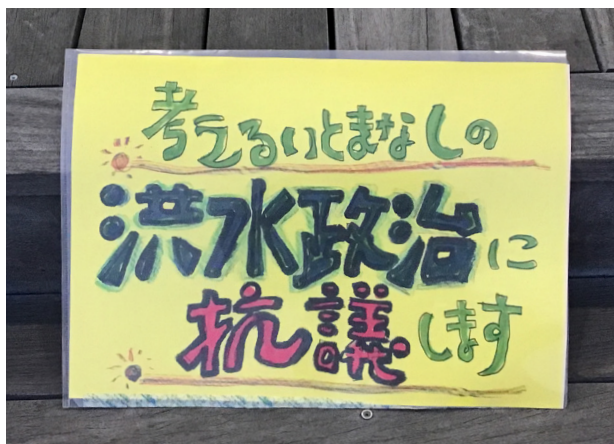
菓子パデモ

その菓子パに、お菓子を持ってピクニック気分で参加してみました。場所は、いつもペンライトデモをしているのと同じ金沢駅前イベント広場。広げたシートにお菓子とプラカードを並べ、三々五々集まってきた人たちが、シートに腰を下ろしてぼつりぼつり気持ちを語り始める。マイクなし、コールなし、聞いているだけでしゃべるのはパスもあり。



若い人たちがほとんどの、小さななま声で、だけど真剣な本音の吐露。駅前デモおわった後で、すごく誰かとしゃべりたかった/一人でぐるぐる考えると病んでしまう/周りにこういう話できる人がいない、家族とも話せない/国会でしてること全然ついていけない、自分の精神衛生のために来ました/政治的アカウント作って発信してるんだけど、そのこと言うと、偉い、勉強してるね、って言われちゃう。その度、違う！って思ってる、などなど。

みんな話を静かに聞いていた主催者の学生さんの一人が「私は本当〜に戦争がやだ！誰にも死んで



ほしくない（涙）、みんなが幸せだったらいいのに。今20歳だけど弟、妹はこの先10年、私みたいに自由に生きられるかな。私もいつか結婚したい、子どももほしい、って思ってる。だけど考えちゃう、生まれてくる子の未来。これじゃ下がるわけだよ！出生率。防衛費それ自体批判しないけど、順序違うかい？って思う。デモって言葉がこわいと言う友だちがいて、ならこわくないデモしよう、って今日の菓子パを友だちとすることにしたんです。こんなこと、大学でもしたよ。どでかいフルーツポンチつくって食べながら30人ぐらいでしゃべった。不安に思ってることから始めると、人は意外と話してくれる。不安をボードに書き出していったらいつの間に、政治に、憲法に、つながっていったんです」

風に吹かれながら食べたり涙したり笑ったり、誰も仕切らず、それぞれ抱えてる不安を20人ちょっとで語りあった2時間。ただ穏やかに暮らしたいと願っているだけなのに、ここまで若い彼らを不安にさせてる今の政治って一体何なんだろうと思います。思うと同時に、こんな時間を体験したことが、あ、自分一人じゃないんだ、こういう話をしてもいいんだ、って思える、次の誰かと話せる勇気の種子にきとなる、社会のこと話しやすい空気を育ててく、と私は信じます。

そんなふうに話題にすることを今とりわけ大事だと思うのは、社会について、政治について、話す/考えるのが一部の人たちだけじゃない方が断然いいって思うから。話す人、話せる場が増えれば、その分、話しやすい空気が増える。思っても周りや世間を気にして話題にしないままだとその分、話しにくい、話せない、の空気が世の中に増えていってしまいます。

駅前でも 街なかでも

まだ寒かった春ごろ始まった駅前ペンライトデモ、回を重ねるごとに若い人が増え、8月のデモではスピーチするほとんどがそういう彼らでした。用意されていないとっさに出てきた言葉、政権に対して言わずにおれない怒りの声、涙に詰まりながらのたっ

たひとこえ、この場を毎回準備してくれる人たちへの感謝の声。そういう彼らの言葉に拍手するためにも駅前にまた行こうと思わせてくれる、8月のデモでした。菓子パデモを主催した学生さんとも久しぶりに再会できました。

写真は、前月のデモの時に始まった「一人一文字九条」、九条の条文を、一人が一文字ずつ筆で書く、という試み。8月のデモしてる間に完成して、デモの最後にお披露目をしているところです。

デモで出会った同士、立ち話でなく時にはもっとゆっくり語り合いたいね、ということで、駅前デモを主催してる人たちが街なかのカフェで2回目の「平和についてみんなで話すカフェ、PEACE CAFE」を開催する由。菓子パデモの学生さんと、次回はそこで会う約束をしました。

2026/8/26

